Wolters Kluwer

Let's Talk Vaccines

A Clinician's Guide to Addressing Vaccine Hesitancy and Saving Lives

Gretchen LaSalle

ワクチンの話をしよう

ワクチンをためらう患者と向き合う医療者のための手引き

堀　愛 ◆翻訳

中外医学社

CONTENTS

Chapter 1 ワクチンの歴史 …… 1
Chapter 2 反ワクチン運動の再流行 …… 15
Chapter 3 反ワクチン運動の心理 …… 30
Chapter 4 反ワクチンをやめた理由 …… 45
Chapter 5 安全性と有効性を守る米国の制度 …… 69
Chapter 6 ワクチン躊躇へのアプローチ …… 91
Chapter 7 リスクを取る価値 …… 108
Chapter 8 反ワクチン運動の原点 …… 126
Chapter 9 ワクチンへの疑問に答える 1 …… 138
Chapter 10 ワクチンへの疑問に答える 2:
特定の集団 …… 162
Chapter 11 ワクチンへの疑問に答える 3:
インフルエンザと HPV …… 185
Chapter 12 ワクチンに含まれる成分 …… 206
Chapter 13 ワクチンに関する情報を見極める …… 219
Chapter 14 ワクチン接種を成功させる …… 243
Chapter 15 行動しよう …… 255
Chapter 16 パンデミック期のワクチン推進 …… 261

索引 …… 317

序　章

インフルエンザの流行期の真っただ中，私はある患者──アンさんとしよう──に，インフルエンザワクチン接種を勧めていた．プライマリ・ケアに携わる多くの医療従事者と同じように，私もインフルエンザの流行期に特有の苛立ちを感じていた．インフルエンザワクチンをはじめとするワクチンには，人々を重い病気から守り，何十万人もの命を救う可能性があることを，私たちは知っている．医療従事者なら誰でも，インフルエンザ患者や肺炎患者を診たことがあるし，こうした病気で大切な人を亡くした家族を知っている．子宮頸がんや咽頭がんによって，深刻な苦痛を経験する患者を目の当たりにしたこともある．ポリオが猛威を振るっていた時代を覚えている患者もいるし，現在もポリオ後症候群を抱える人がいる．医療に携わる多くの者にとって，ワクチン接種を勧めることは当然のことである．私たちは，自分自身や大切な人，そして地域の人々を守りたいと思っている．にもかかわらず，なぜか一部の患者は，私たちのワクチン接種の勧めをすんなりと受け入れてくれない．その理由を理解することは，私たちにとって容易ではない．

ここ数年，私は患者やその家族にワクチンを勧めるとき，「いいえ，結構です」の一言で会話を終わらせないようにしている．なぜ断るのかを知りたいからである．患者や地域社会の健康のために，誤解を解き，正しい情報を伝え，患者が誤情報ではなく事実に基づいて判断できるようにすることは，私たちの責務である．そこで，アンさんが「いいえ，結構です」と答えたとき，私はもう少し踏み込んで尋ねてみた．

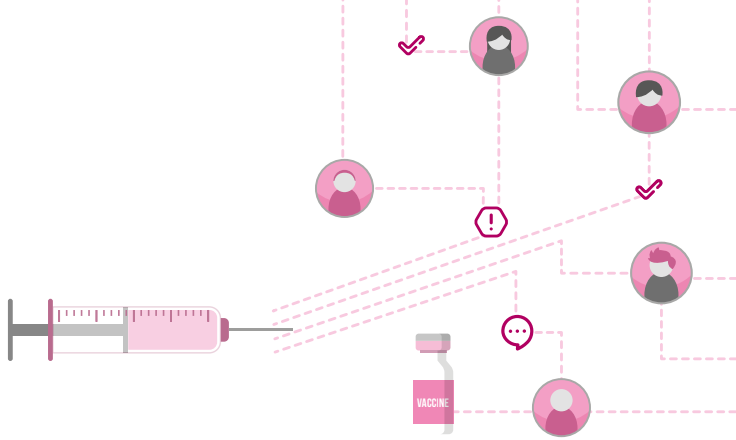
「インフルエンザワクチンについて，何が心配なのか教えてください」

すると彼女はこう答えた．

「ワクチンで，がんになることがあると聞いたんです．私の家族は，ほとんどみんな何らかのがんで亡くなっています．自分ががんになる可能性を高めるようなことは，したくありません」

Chapter

1



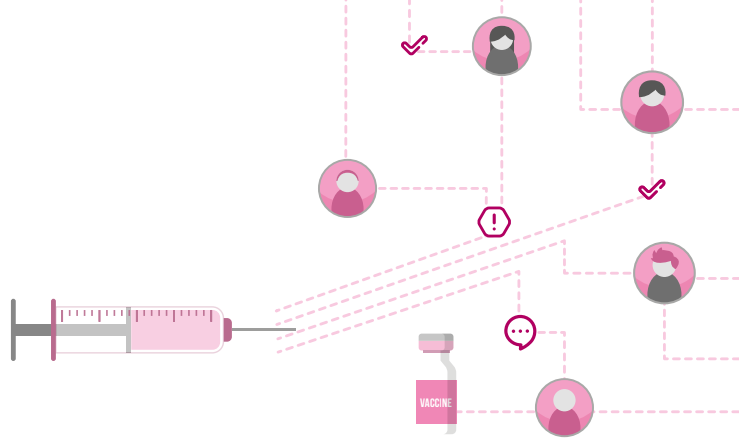
ワクチンの歴史

私は 1736 年，4 歳の愛する息子を天然痘で失った．
以来私は，彼に予防接種をしてあげなかったことを悔やみ続けている．

——ベンジャミン・フランクリン

この章では，ワクチンで予防可能な感染症と，ワクチンの起源についての歴史を振り返る．ワクチンで予防可能な感染症は，かつて数多の帝国を崩壊させ，人類の歴史を変えてきた[コラム 1.1]．しかし 1796 年にエドワード・ジェンナー[図 1.1]が天然痘のワクチンを発見すると，人類は悲惨な疫病に打ち勝つ希望を見出した．ワクチンの開発は人類の科学的偉業の一つであり，現代医学において最も多くの人命を救ってきた．ワクチンのおかげで，天然痘は地球から根絶された．現代の子供たちは，祖父母の世代と違って天然痘のワクチン接種を受ける必要がなくなった．ポリオは米国にはもはや存在せず，数ヵ国で（ごく稀に）発生しているだけで，近い将来，根絶が見込まれている．現代の医師の多くは破傷風の症例を見たことがない．1938 年にインフルエンザワクチンが導入されて以来，（因果関係の証明は困難とはいえ）1918 年のスペインかぜのようなインフルエンザの大流行は起きていない．スペインかぜでは，世界の人口の 1/3 の感染者と 5,000 万人の死亡者を出したと推定される（第一次世界大戦の死亡者数を上回る）．ワクチン接種の登場により，ワクチンで予防可能な感染症の疾病負担は 92 ～ 100%減少してきた（厳密に

JCOPY 498-07930



Chapter

2

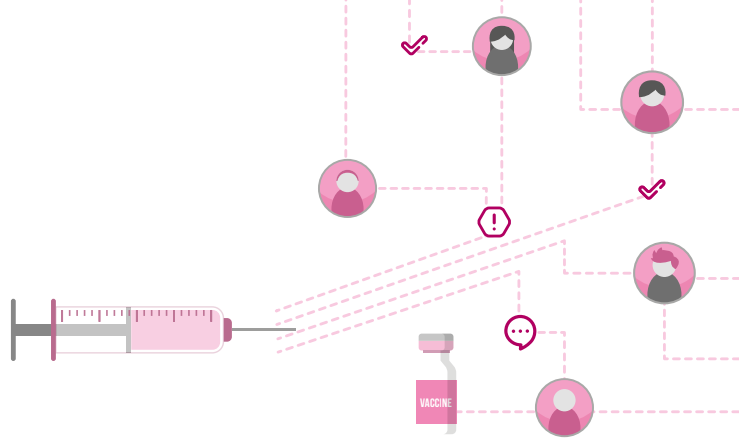
反ワクチン運動の再流行

過去の歴史は繰り返される．想定外の出来事も繰り返される．
人間は経験から学べないのだろうか？

——ジョージ・バーナード・ショー

反ワクチン運動は，医療や公衆衛生を襲う新たな脅威に見えるかもしれない．しかし反ワクチン感情の起源は意外に古く，ワクチンの開発当初にさかのぼる．ジェンナーが初めて天然痘ワクチンを導入した 18 ～ 19 世紀以来，科学技術や医療は格段に進歩を遂げた一方で，ワクチン反対派の主張や手法はさほど変わっていない．当時の記録には，ワクチン反対派と推進派の対立について，次のような記述が残されている．「ワクチン推進派は，英国王立協会が奨励する冷静で客観的な文面で，理性に訴える表現を用いて，科学の進歩や紳士間の礼節を頻繁に強調している．対してワクチン反対派は，扇動的な文面で，過激な表現と恐怖をあおるストーリーを用いて，妄想を助長させている」[1)]．現代にも通じる話だ．

ワクチン反対派と推進派が，ワクチン接種について合意に達することは，今後もないだろう．とはいえ，絶望する必要はない．過去に学び，ワクチン反対派の懸念の背景にある理由や，古今のワクチン反対派の手法を分析することは有益だ．そうすることで，ワクチンの有効性と安全性について，より深く理解できる可能性がある［コラム 2.1］．1800 年代であれ 2000 年代であれ，ワクチン接種に反対する主



Chapter

3

反ワクチン運動の心理

明らかな誤謬を熱狂的に信じることは，
最もありふれた愚行であり，人間の本性でもある．

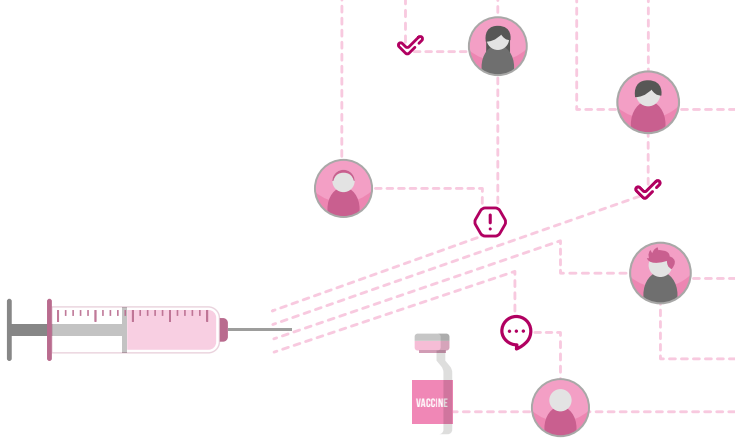
——ヘンリー・ルイス・メンケン

医療従事者がワクチン反対派の患者と対話する場面で，再現性のある効果的なアプローチは，残念ながらこれまでの研究で見出されていない．特に，患者教育や誤情報の修正を試みても，ワクチン反対の考えを改めるケースは稀であり，かえって疑念を深めてしまう恐れがある[1–3]．数字や統計を持ち出したくなるが，それが逆効果となる場合も少なくない．とはいえ，ワクチンに関する教育が不要というわけではない．医療従事者は，ワクチンの背景にある事実やデータ，科学的根拠について簡潔に説明できるよう準備しておく必要がある．ワクチン反対派の人々は，自分たちの懸念を裏づけるために，何時間もかけて「勉強」していることが多い．そうした問いにきちんと向き合える知識がなければ，医療従事者は信頼を失い，むしろ「患者のほうが詳しい」といった誤った認識を与えかねない（ワクチン反対派の懸念とデータに基づいた反論についての詳しい議論は，第 9 章，第 10 章，第 11 章を参照）．さらに，もし医療従事者が，稀であっても現実に起こりうるワクチンの深刻な副反応の存在を認めようとしなければ，患者や子供の利益を第一に考えていないと受け取られ，やはり信用を失う恐れがある．

JCOPY 498-07930

Chapter

4



反ワクチンをやめた理由

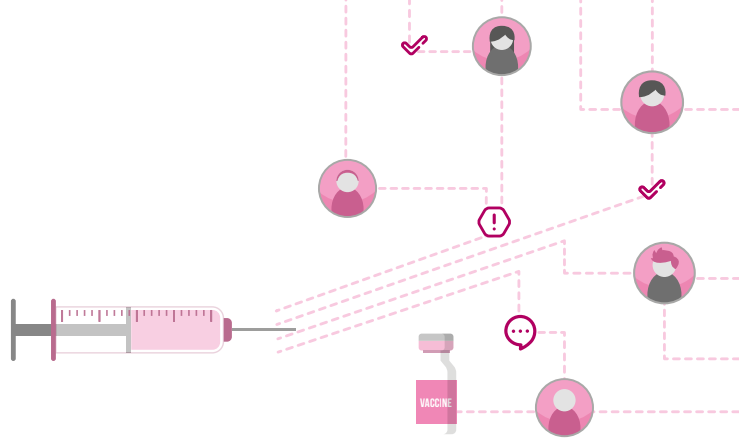
自分の間違いを認めるのは，恥ずべきことではない．つまりそれは，
今日の自分が昨日よりも賢くなったということだから．

―― **アレキサンダー・ポープ**

医療従事者の多くは，ワクチン接種を躊躇する患者の考えは変わらないとあきらめている．これこそが，私たちが直面する課題だ．これまでに患者に教育や支援を試みたがうまく行かず，もはや自分たちには変えられないと自信を失っているかもしれない．あるいは，反ワクチン派の患者や保護者と接するうちに，否定的な感情や怒りが生じて，結果としてそうした患者を「考えを変えようとしない理不尽な陰謀論者」とみなすようになってしまったかもしれない．確かに，頑なな姿勢を崩さない筋金入りの反ワクチン派の患者も存在する．そうした人々は，他者の意見に耳を傾けることはないだろう．ただし，そのような少数派は反ワクチン派を支持する医療機関を探し求める傾向があるため，私たちのもとを訪れる可能性はそもそも低い．

私たちが日常診療で接する患者は，いわゆる「反ワクチン」ではなく，ワクチンに慎重になっているだけの場合が多い．本人自身も子供の頃にワクチン接種を受けており，公衆衛生上の恩恵についても理解している可能性がある．自分自身や子供の健康のために，最善の選択をしたいと願っているのだ．ただし，友人や家族，ソー

JCOPY 498-07930



Chapter 6

ワクチン躊躇へのアプローチ

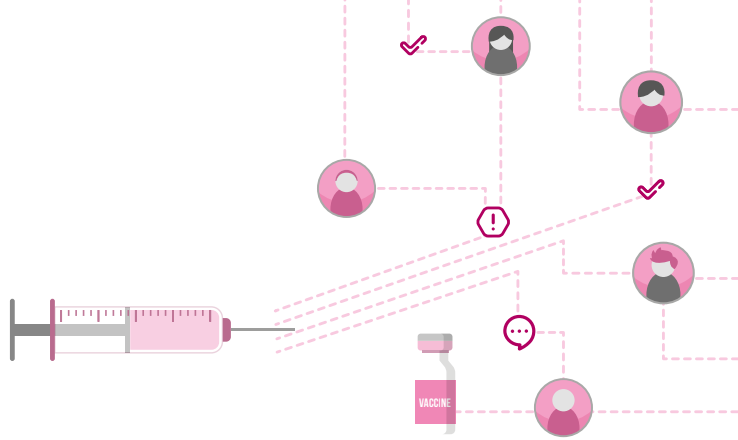
1さじの蜂蜜は，1ガロンの酢よりも多くのハエを捕まえる．

——ベンジャミン・フランクリン

ベンジャミン・フランクリン〔訳者註:「アメリカ合衆国建国の父」と呼ばれる政治家，100ドル紙幣に印刷されている偉人〕の格言の由来や本来の意味については諸説あるが，一般には「他者を説得するには，耳の痛い辛辣な言葉（酢）よりも，優しさと思いやりのある言葉（蜂蜜）のほうが効果がある」という教訓として広く知られている．配偶者，親，子供など，身近な人と意見が対立した際の経験を思い起こせば，この言葉の真意を理解できるだろう．相手が怒りや苛立ちをあらわに接してきたとき，私たちはどう感じるだろうか．話の途中で言葉を遮られたり，あきれたような表情をされたり，ため息をつかれたりしたら，どのように受け止めるだろうか．たいていの場合，そうした状況では相手の主張を冷静に理解することが難しくなる．人は身構え，耳を閉ざし，共感し理解する脳の部分のスイッチが切れてしまう．そして，議論を深めようとするのではなく，自らの立場に固執しがちになる．

ワクチンを躊躇する患者と接するときも，同様のことが起こりうる．もし医療従事者が共感や敬意に欠ける姿勢で向き合えば，患者は私たちの苛立ちや上から目線

JCOPY 498-07930



Chapter

7 リスクを取る価値

人生の中で恐れるべきものは一つもない．ただ理解すべきことがあるだけだ．
そして今こそ，私たちの恐れを小さくするために，理解を深めるときである．

—— マリー・キュリー

ここまでの章では，ワクチン，ワクチンを推奨する医療従事者，製薬企業などに対して，ワクチン反対派による根拠のない主張を取り上げてきた．これ以降の章では，ワクチンにまつわる多くの神話を検証していく．まず本章では，ワクチン接種に伴うリスクを正しく認識し，理解することを目標とする．ワクチン接種に伴うリスクは，ワクチン反対派の主張とは異なり，患者を意図的に危険にさらすために秘密にされているものではない．むしろ，こうしたリスクは公開され，人々が読んで理解できるようになっている．加えて，ワクチン反対派が訴えるほど頻繁でも重大でもない．

周知の事実とは思うが，医療従事者ではない読者（そうした方に届いてほしいと願っている）に向けて，明確にしておきたい．医師や科学者は，ワクチンが 100% 安全であるとは主張していない．第 5 章で述べたとおり，ワクチンは承認前後にわたり厳格な試験を繰り返し受けており，安全性に問題がないか確認される．多くの候補ワクチンは，目標を達成できなかったり，リスクが大きすぎたりするため，市場に出ることはない．しかし，厳しい試験を経て有効性と安全性が確認され，広

JCOPY 498-07930